

## 「思春期こそ、人類の発展」

校長 高田 晶子

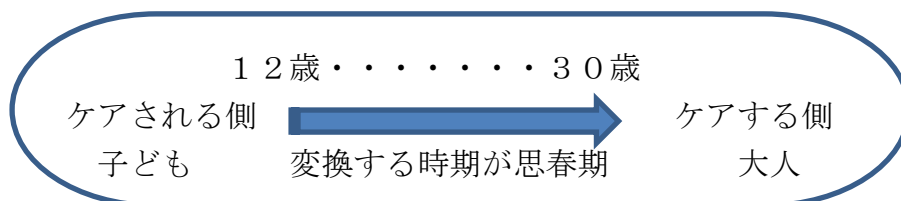
1学期のまとめの時期を迎えました。生徒たちの日々一生懸命な姿に元気もらっております。

今年度もコロナ禍の中の学校総合体育大会実施となりました。保護者の皆様には、各会場での温かい見守りのご協力により、今ある力を精一杯出し尽くすことができた結果となりました。ご支援ありがとうございました。



さて、「思春期」と聞きますと、大人の皆さんは“厄介な時期”とか“中学校期のやんちゃな時期”と思われる方も多いのではないのでしょうか？

NHKの番組で「思春期」の大変興味深い内容を放映していました。「思春期」とは、一般的には12歳頃から18歳頃までと言われているようですが、科学的に捉えると、なんと30歳までなのだそうです。社会人になってもまだ思春期が続いていたなんて驚きました。



変換する時期の思春期には、肉体的変化（身長が伸びるなどの「思春期スパート」）や心の変化（ざわつく思春期）がみられます。そして、無鉄砲になる時期でもあるので、どれだけ無茶できるか試したくなったり、人に認められたくて度肝を抜くようなことをしようとしてみたりするようです。ハイリスク、ハイリターンの攻めの姿勢とも言えます。その衝動性があることで、人類の繁栄に影響をもたらしてきたといえるそうです。この時期が過ぎると、脳がミエリン化され、神経線維が発達して抑制がかけられるようになり、思春期が終わるということです。人は必ずミエリン化するそうなので、ミエリン化するまでにいかに多様な経験やチャレンジをしておくかが、大切だそうです。確かに、子どもたちの無謀な夢や行動に対して、ミエリン化した大人は、「そんなの無理よ」「やめておきなさい」などと言ってしまいがちです。大人は、抑制をかけてしまうというのがわかります。経験を積ませるという上では、無謀な夢に向かう子どもたちを見守りながら、否定しない、抑制をかけすぎないということが大切なのではないでしょうか。

30歳までの自分を振り返ると、確かに社会に出ても何もできず、人付き合いも下手くそで、いろいろな壁にぶち当たっていたことがよみがえってきます。落ち着いたのは年を重ねたせいというより、ミエリン化できたからなのではないでしょうか。自分の過去と今を振り返り楽しむしかありません。皆さんはいかがですか。